
@系文芸部(β版)

翔龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

@系文芸部（β版）

【Nコード】

N3571E

【作者名】

翔龍

【あらすじ】

アニメなどの文化が衰退し始めて、減少するオタク！その中で生きようと@系高校生、神田駆が愉快的仲間達と革命を起こす物語！
！……になるのかなあ……なりそうにないなあ

@0「@系序章へプロローグ」

——オタク。マニア。ニート。引き籠もり。ネット廃人。

これらは、最近よく見かける単語である。フレイズ他にも色々あるが主にこれらはアニメや漫画やゲームやネットなどの物から生まれた人々達だ。

しかし、いずれはこのような人々たちが減る時代が来るであろう。この物語はアニメや漫画やゲームやネットが激減した時代に起きた小さな小さな物語である。

@

彼の趣味には古本屋にて、本を定価の半分で大量に買うという物がある。これによって彼は少しばかり多くの本を買うことができる。いや、新品で二十冊買うならば、中古で四十冊ほど買え、新品で百冊買うならば、中古で二百冊買えるのだから、先ほどの『少しばかり』と言うのは冗談という事にしておいてくればいい。

そして、今日もその趣味のために古本屋に彼は行ってきた。自動ドアから出てきたその少年にはこの世の物とは思えぬほどの笑顔が、手には二袋ほどの本（およそ二・三十冊）が。

「今日もいい買い物したなあ。あの新刊がもう出ているとは思わなかった」

彼はどれだけの勉強家なのだろう！ 中には分厚い本がいくつもあるし、さらに驚きなのは彼の家には高さ二メートルほどの大きな本棚が何個もある。家族の物はなく、彼専用の本棚である。

数千にもものぼる大量の本を彼は読破している。

彼の名前は神田かんた駆。かける中学三年を終え、冬休みに入り、もうすぐ高校生の最強勉強家、神田駆である！！

.....

ん？ ちよつと待てよ？ 彼が買ってきた本というのは.....

・ 「これは本当によかったあ！ 絵描きが綺麗で、ストーリーも面白いしな」

この本は小説にジャンルされるのだろう。さらに文庫本というジャンルに属する。中には所々、アニメ調の絵が描かれている。こういうのはライトノベルにジャンルされるのでは？

.....

最初の堅苦しい書き方はやめるとする。少々簡潔な分ですら^{ストーリー}と物語を進めるとしよう。

神田駆。最強のライトノベル所有者、神田駆の物語には堅苦しい漢字は必要ない。表現も必要ない。『堅苦しい』という漢字すら使いたくなくなる。

この物語は神田駆が疾走する^{アキバ}@系破天荒物語だ！！^{ストーリー}

@1「@系高校生」

この物語の世界ではアニメや漫画やゲームやネットという物は最近減り続けている。

急な機械関連の物価の値上がりで、ある大きなアニメ会社が潰れてしまう。

しだいにアニメ関連商品の販売店や製作会社もなくなっていった。それが火種となり、オタクブームは崩壊していた。

しかし、オタクというのは何もアニメだけではなく、インターネットにもいる。動画共有サイト、ファイル交換ソフトがさらに流行る。

が、国の中で著作権について問題となり、動画共有サイトやファイル交換ソフトの運営者や製作者に制限がかけられた。

オタクというのは今では”死語”となっていた。

なぜ、このような堅苦しい語り方で始めたには訳がある。

この事が死活問題につながるような状況の人々はこの世界にもいる。オタクはまだ大量にいる。

ある県立高校に通う高校生、神田駆もそうだ。彼の趣味は小説を読み、小説を書くことだ。

彼にとつては先ほどのことが深刻で尚且つ過酷な事であった。

この物語は、アニメや漫画やゲームやネットが減りつつある世界で懸命に小説を書き続ける@系^{アキバ}破天荒^{ストーリー}物語だ！！

@

「高校か、いやだなあ〜」

レベルの少々低い県立高校に推薦で受かった神田駆には冬休みがたっぷりあり、まだたっぷりと残っている。そんな中、彼はこんな

事をつぶやいた。

「高校つて行かなくても小説書くことは、できるんだけどなあ」
彼にとって、小説を書くことは最も楽しいことであり、最も生きている感触を味わうことができる趣味であった。高校という場所に興味など示しはしなかった。

「買いだめであった本でも読もう！」

彼は大量に買い込んだ本を読み始める。『速読』という方法で読む彼のスピードは半端ではなかった。彼が書いた小説は本何十冊にものぼるし、彼には本を読む・書くの才能があった。

しかし才能という素晴らしい物を持っているにも関わらず、彼はやるせない生活をダラダラと過ごしていた。

それには理由がある。

彼の住む世界、時代ではオタクというのは時代遅れの人間であった。彼はブームに乗り遅れた人である。

周りに一人もオタクと呼べる人は中学にはいなかった。だから、自分というのは変な奴だと自分で思っている。

ダラダラとした日常はあつという間に過ぎ、入学式当日になった。ダラダラとした日常には特に進展はなく、つまらないものなので省こう。

ダラダラとした日常に彼は分かれを告げる時こそが、この物語のスタート
始まりなのだから。

ダラダラとした日常に別れを告げたのが、入学式を迎えて次の週。部活の入部期間が始まった頃である。

高校一年生は全員、部活に入らなければならないのだが、神田駆は凄まじい勧誘の発生源の先輩の熱意に暑苦しさを感じ、運動部はやめることにした。

そして、特に勧誘の活動をしてなかった文芸部に入ることには彼は

決めた。

それが、物語の始まり《スタート》を意味していた。

@

大量にある教室の一つに文芸部の部室は存在する。
教室より少し大きな部屋が活動場所となっている。

「はじめまして、神田駆です。よろしく」

彼は少し驚きを感じていた。文芸部と言えば地味なイメージがあるのだが、ここにいる駆を含む四人の部員は普通の高校生で構成されていた。

「私は、花岡です」

元気な笑顔を見せる先輩。

「僕は秋原です」

メガネをぐいっと押し上げる頭のよさそうな先輩。

「わ、わたしは、さ、佐久間です」

中学生以下に見えてしまうおどおどした同級生。

花岡、秋原、佐久間、神田駆

上記四名が文芸部の部員である。

@

一旦、普通の高校生だと思っていたが、違った。

彼ら、彼女らは圧倒的な知識を持つ、『時代遅れの者』であった。

最高の笑顔を浮かべてくれた花岡先輩。

好きな本は萌える美少女が活躍する本とカッコいい美少年が登場する本。

男同士もいけるそうだ。

メガネをかけて、一流の弁護士になりそうな秋原先輩。
子供の頃に女の子に憧れたそうで、少女漫画が好きである。
実は女装癖の持ち主。

おどおどして危なっかしい佐久間さん。

猟奇、狂気系のものが好きという裏面がある。まあ一応、ヤバイ
状況でがんばる主人公やヒロインが好きなのだそうだ。

小説を読み書きまくる神田駆。

彼には小説を読み書きまくる能力しかない。読む本のジャンルは
様々。

この物語はこの変わった人々により構成される@《アキバ》系破
天荒物語である！！
ストーリー

@1「@系高校生」(後書き)

文体が硬かったり、そうでなかったり……
スミマセンm(・・)mこれからは気をつけます。
では ノシ

@2「@系創作記」

@2「@系創作記」

この物語の世界ではアニメや漫画やゲームやネットという物は最近減り続けている。

（これは忘れちゃいけない設定。おそらく最後のほうで関係してくるぞ！たぶん……）

そんな、時代遅れの者とまで呼ばれてしまうオタクの一人が神田 駆。

この物語は彼と彼の愉快的仲間たちの提供でお送りする、@《アキバ》系破天荒物語である！！

「小説に必要なのは『設定』『登場人物』『事件』というのは知っていますね？」

神田 駆は先輩2 + 同級生1にそう言った。白のホワイトボードに『設定』『登場人物』『事件』とでかでかと書いてある。

「皆さんはこの中でどれが大事だと思いますか？」

なぜ、こんな講義みたいなもの（実際に講義だが）を駆が先輩2 + 同級生1相手にやっている理由は簡単。

駆が先輩2 + 同級生1より小説を書くことがうまいからだあww

「先生！ 私は『登場人物』だと思います！」

何人もの男子を彼氏にしてそうな美少女、花岡先輩が手を挙げる。

「だって、美少女がいれば、萌え萌えで燃え燃えですよ」

と、きやつきやと騒ぐ先輩。

「あと、カッコいい美少年がいれば——」

「あ、もういいです」

このまま、一話分まるっと語られては困ると思い、駆は先輩を阻止する。

「では、秋原先輩」

『格好良い』という漢字が似合いそうな秋原先輩がメガネを上に乗し上げて、言う。

「やはり、『事件』というのが大事だと思うね。『事件』が起きないと物語は始まりません」

真面目な口調で真面目に答える。

——確かにそうだ。花岡先輩との違いがよくわか

「だって、少女が少年に恋をするってめちゃくちゃいいじゃないすか！ やっぱり、恋がなきゃ——」

らなかった。まったく、この先輩達はー！

「あ、あの私は、ど、どれも大切だと思いますう」

佐久間さんはしゃべり方がすごくかわいいが

「だって、恐ろしい『設定』と普段はユニークな『登場人物』と急変する『事件』がないと狂気漂う殺人は起きません！」

——アナタガイチバンオソロシイデスヨー

「さて、俺がいたいのはね！」

と、さっきの佐久間さんの話は忘れましょう。

「やっぱり『設定』『登場人物』『事件』どれもかけちゃいけないんです！」

つまり、練りに練った『設定』『登場人物』『事件』が面白い小説を作るか否かの重要な点なんです！

そうしないと、アニメや漫画や小説に人気が出ません！ 今まで以上の物を考えなければいけません！」

佐久間さん、惜しいんですよ！ 『狂気漂う（ry』なんて事は言っちゃだめなんですよ！

@

駆くんの書ける小説講座（命名：花岡先輩、（C）花岡先輩）第
一回「『設定』『登場人物』『事件』について！」が終わり、ホワ
イトボードも片付けられていた。
なぜ、駆くんの書ける小説講座（命名：花岡先（ry）が開かれた
のか？

それにはちゃんとした理由がある。

@

今日の部活の一番最初に、駆は新入部員らしい質問を先輩二人に
ぶつけた。

「あの、花岡先輩や秋原先輩ってどんな小説書いてるんですか？」
一斉に顔の向きを変える。駆の視界には花岡先輩と秋原先輩の頭
しか見えない。

何かの勘違いかなと思って、駆は目をゴシゴシとやってから、も
う一度言う。

「あ、あの……」

明らかに拒絶している。そんなにこの文芸部らしい質問はだめだ
ったのか？と思う駆。

「じ、実はさ——」

と、花岡先輩が汗をダラダラに流しながら言い始めた。

「わ、私ね。去年の先輩に誘われて入ってさ、その先輩とはすごく
気があったんだけどねえ——」

次に衝撃的な事を言ってくれた。

「実は小説書けないんだあ、てへ」

ただ呆れるだけの駆。文芸部なのに小説かけないって、絵が書け
ないのに美術部入った作者じゃあるまいし……。

「じゃあ、もしかして秋原先輩も？」

「あ、はい、うんそうです。エハカケルンデスケドネエ」

じゃあ、ア二研か漫画研に行け。もしくは美術部でも行って作者

と変われ。

「あの、佐久間さんは？」

これまた、視線が合わない。

「じ、じつは、か、書けないです」

今回は恥かしくてうまくしゃべらない訳ではない。冷や汗をかいているし。

「で、言いにくいんだけどさあ——」

花岡先輩まだ何かあるんですか？つと聞き返すと

「十日後までに学校の中で三十人は興味を持つような小説を書かないと、次の部活管理会議で廃部になるかもお」

「小説書けなのに、なぜ文芸部入ってるんですか！！」

駆が怒鳴る。花岡先輩は少々、黙る。

「——結局、」

その声はいつものような明るい声ではなかった。

「オタクっていう私達の居場所なんてね、どこにもないんだよ。でも、去年の先輩を見てて思った。ここには私達の居場所があるって、ここに居ていいって」

駆も実際にそうだった。オタクという人間は居場所を求めた、それが秋葉原だった。でも、今は秋葉原の文化も減ってる。

居場所がなくなっていく。

「……そうですね。だったら、変えてみましょう！ 誰もが面白い作品を、学校が揺るぐような小説を書いてやりましょう！ そして

——」

駆は続ける。

「俺たちの居場所を作りましょう！」

@

こうして、駆くんの書ける小説講座（命（ryが誕生したのである。果たして、オタクへの意識を変えるような小説を書くことができるのか！！

この物語はまともに小説を書けない文芸部 + α が繰り広げる@《アキバ》系破天荒物語である！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3571e/>

@系文芸部(β版)

2011年1月3日22時50分発行